



日本福祉大学

国際学部だより

News Letter

Faculty of Global Studies

SEPTEMBER 2026 vol

24

目次

- P.1 学部長からのメッセージ
- P.2-3 フィールドワーク体験
・「フィールドワーク入門」
・「国際フィールドワークⅠ」カンボジア・フィリピン・沖縄
- P.4-5 アクティブラーニング期間の活用:実践報告
・国際交流活動とスリランカでのフィールドワーク
・日本の小学校とインドネシアでのフィールドワーク
・文学作品の聖地巡礼形式の国内フィールドワーク
- P.6-7 資格とキャリア
・英語科教員を目指して(在学生、2025年度卒業生)
・日本語教師を目指して(在学生、2023年度卒業生)
- P.8 卒業後の進路:大学での学びを就職へ
・2025年度卒業生の近況報告(空港旅客サービス業)
・2023年度卒業生の近況報告(旅行・観光業)

「国際学部」では、2027年度から3コース(履修モデル)が設定されますが、1年次にフィールドワークの基礎と実践を学び、2～3年次のアクティブラーニング期間の活用につなげることは、学部の基盤として

続きます。今回のニュースレターでは、その実際の様子を紹介するとともに、学部で取得可能な資格(英語科教員、日本語教師)やボランティア活動などの取り組みから、キャリアを切り拓く在学生・卒業生の声をお届けします。



☑ 「経験は後から効いてくる」

学部長 佐藤 慎一



このニュースレターに寄せられた学生・卒業生の声を読んで、あらためて感じるがあります。カンボジアで「電子機器が一切使えない村」に驚いた学生も、フィリピンで自分のテーマを決めずぐに現地へ飛び込んだ学生も、教育実習や日本語教師を目指す学生たちも、共通しているのは「まず現場に行ってみた」ということです。

現場で得た気づきは、その場ですぐに答えが出るとは限りません。むしろ、時間が経ってから、就職活動の面接で、あるいは初めての出張先で、ふと役に立つ——そんな声を卒業生の便り

からも感じ取っていただけるのではないのでしょうか。

私自身も今年度、カンボジアの小学校やフィリピンの高校・大学等を訪れ、子どもたち、生徒・学生たちと直接言葉を交わす機会がありました。言語や文化の違いを越えて笑顔でやりとりする瞬間は、何年経っても喜びと新鮮な驚きがあります。教員も、学生と同じように現場に出て学び続けているのだ、ということが伝われば嬉しく思います。

こうした経験は、教室の中だけでは得られません。もし少しでも興味を持ってくれたなら、オープンキャンパスでぜひ在学生の話も聞いてみてください。



☑ フィールドワーク体験

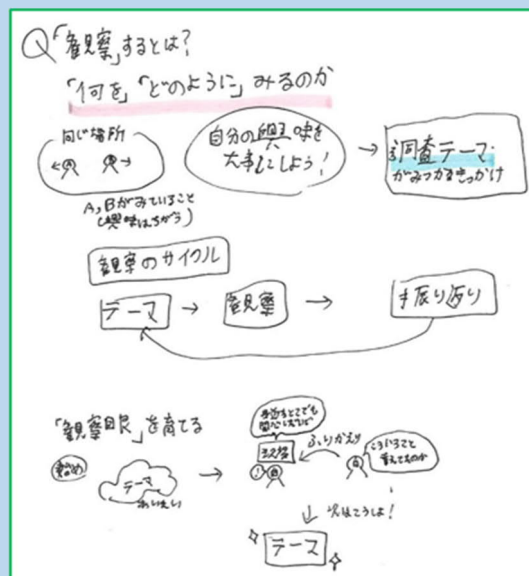
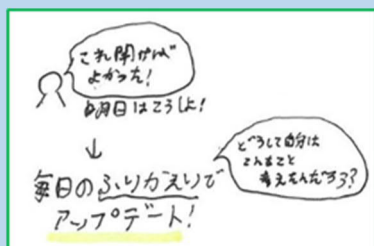
国際学部では 1 年次に調査研究の基礎を学び、国内外のフィールドに飛び出します。ここでは、2025 年度新規開講の入門科目と 2 月実施のカンボジア・フィリピン・沖縄での研修の様子を紹介します。

「フィールドワーク入門」

科目担当教員 小國 和子

国際学部ではさまざまな国内外での現場体験や現地調査を単位化できる制度が整っており、「フィールドワーク入門」は、それらの実践に向けた基礎知識を習得し理解を深める科目です。「学生自身が関心のある現場に身を置いて、五感を使って体験的に観察、記録し、自分の事も見つめ直すフィールドワークという調査研究手法の魅力を手ほどきすること」を主な目的として、2025 年度から開講されました。

授業では、大学生にとってのフィールドワークの解説にはじまり、基本的な手順として、①フィールドノーツの取り方や、②データとしての写真の扱い、③インタビュー実践（質問を考え、話を聴きながらメモを取り、インタビューする）、④清書ノーツの作成、⑤フィールドワークの危機管理と調査の倫理的配慮といった項目を扱います。学生はほぼ毎回事前に事前課題を提出し、それら学生の実際の素材を教材として授業を展開しています。



(図: 学生が授業で作成したメモの例)

1年次の2月には国内外のフィールドワークに参加する国際学部1年生にとって必須の基礎として、日常的に観察・記録・振り返りをすることで自分自身の関心を研究テーマに昇華させていく最初の第一歩となることを期待しています。

「国際フィールドワーク I」:カンボジア研修

国際学部 2 年 荻野 姫花 奈良県天理高等学校出身



私のカンボジア研修は行く前は想像もしていなかったことばかりで、現地での毎日はいま振り返っても「とにかくずっと新しく、刺激的で、楽しすぎた思い出」しかありません。日本とは 180 度違う、あの東南アジア特有の飾らない熱気と街の雰囲気圧倒され、私は一瞬でカンボジアが大好きになりました。特に心に残っているのは、電子機器が一切使えなかった村での生活です。スマホを置いて過ごしたからこそ、目の前にいる村の人や、小学校の子どもたちと全力で一緒に遊ぶことができました。言葉が通じなくても、ジェスチャーや笑顔を交えて心を通わせた時間は、現代の日本では決して味わえない、最高に温かい体験でした。五感のすべてで刺激を受け、自分の中の価値観がガラリと変わるほど、この国に心を奪われました。研修の最終日には、本気で「日本に帰りたくない!」と心から思ったほどです。この研修で出会えた人々と、ここで得た挑戦する勇氣は、私のこれからの人生にとって一生の宝物です。

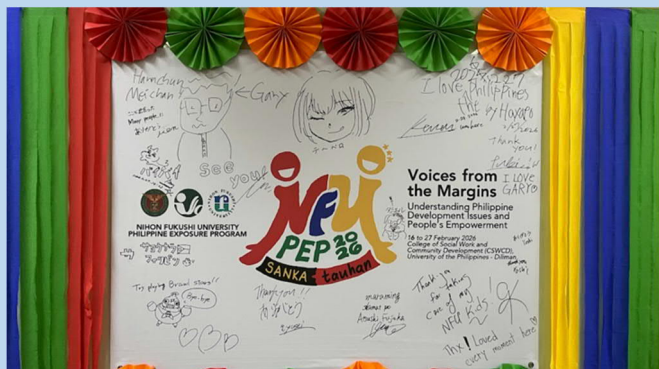
私のカンボジア研修は行く前は想像もしていなかったことばかりで、現地での毎日はいま振り返っても「とにかくずっと新しく、刺激的で、楽しすぎた思い出」しかありません。日本とは 180 度違う、あの東南アジア特有の飾らない熱気と街の雰囲気圧倒され、私は一瞬でカンボジアが大好きになりました。

特に心に残っているのは、電子



「国際フィールドワークⅠ」：フィリピン研修

国際学部 2 年 橋本 颯人 大阪府向陽台高等学校出身



フィリピンフィールドワークでは、「Voices from the Margins」というテーマのもと、さまざまな場所を訪れ、現地のコミュニティの生活や社会について学びました。中でも印象に残っているのは、元タストリートチルドレンだった子どもたちが通う職業訓練の学校を見学させてもらったことです。将来の仕事に向けて訓練を受けているだけでなく、サッカー選手を目指している子どもたちもいて、マクドナルドや FIFA などの世界的に有名な企業から提供された施設があったことにも驚きました。

また、ホームステイ期間中には戦争に関する博物館を訪れ、日本がフィリピンにしてしまった過去の出来事について学びました。過去を学んだ上で、お互いに乗り越え、協力していくことが国際協力には大切なのだと感じました。特にホームステイでは、大学の講義だけでは分からない、現地の生活を実際に体験できて有意義でした。

これからフィールドワークに参加する人は、最初から自分のテーマを決めすぎなくても大丈夫だと思います。まずは現地に行き、見て、聞いて、感じる中で、自分が興味を持てるものを見つけましょう。



「国際フィールドワークⅠ」：沖縄研修

引率教員 田中 真由美

留学生 41 人と、稲澤先生、事務室の沖田さんとともに沖縄へ行ってきました。研修前には留学生のほとんどが「広島」「長崎」については知っていても、沖縄で地上戦があったことや、日本国内に米軍基地があることを知りません。しかし、海軍司令部壕やひめゆり平和記念資料館など沖縄戦の戦跡で話を聞き、また実際に在日米軍基地を見て飛行機の轟音を聞いたり、沖縄国際大学の米軍ヘリ墜落現場を見学したりすることで、「戦争に負けるとはどういうことか」を知り、平和の尊



さを実感したのではないかと思います。

そのほか、空手やエイサーなど内地(沖縄では沖縄県以外の日本の本土をこう呼びます)には無い琉球文化の体験もしました。

しかし、なんと言っても留学生にとって一番心に残ったのは、読谷村(よみたんそん)での民泊(ホームステイ)でしょう。温かいご家族にうちなーぐち(沖縄語)を教えてもらったり、さとうきびを収穫したり、一緒に料理を作って食べたりといった体験は、かけがえのない思い出になったことでしょう。私も大学では見ることのできない留学生の意外な(?)一面がたくさん見られてとても嬉しい気持ちになりました。



☑ アクティブラーニング期間の活用:実践報告

2017 年度から、2年次の 11 月頃から3年次の 5 月頃にかけての約半年間は、各自の興味・関心に応じて、国内外で中長期的・集中的な活動(フィールドワーク、インターンシップ、ボランティア、語学研修など)を計画し、実行しています。

2025-2026 年度の期間には、過去最多の 73 件の単位認定科目申請があり、アクティブラーニング期間を積極的に活用していることがうかがえます。その中から、代表して 3 人の学生の取組を紹介します。

2年次 11月 ~ 3年次 5月

アクティブラーニング期間

国内外で自主的に活動できる人材を目指して

2年次の第4クオーターから3年次の第1クオーターにかけての6ヶ月間は「アクティブラーニング期間」。この期間には、自分の将来を考えながら、興味・関心に応じて留学、フィールドワーク、インターンシップなどに中長期的に取り組むことができます。

**アクティブラーニング
取組テーマ例(海外)**

- フィリピンの児童養護施設の生活と環境の調査
- ベトナム農村地帯の変化と農業協同組合の意義
- 一般社団法人での留学生就活サポート職業体験





アクティブラーニングで広がった学び

国際学部 3 年 ルワニ ラクミニ スリランカ出身

私はアクティブラーニング期間を利用して、日本での国際交流活動と、母国スリランカでのフィールドワークに取り組みました。

日本では、愛知県阿久比町の小学校 4 校と中学校 1 校を訪問し、スリランカの文化紹介やダンス体験を行いました。また、給食や掃除にも参加し、日本の学校生活を体験しました。子供たちとの交流を通して、自分の文化を分かりやすく伝えることや、異文化を理解し合うことの大切さを学びました。

スリランカでは、「スリランカの学生の日本語学習と将来」をテーマに 14 日間のフィールドワークを行いました。4 つの学校、日本語教育機関で、日本語を学ぶ学生約 60 名にアンケートやインタビューを行い、日本語の授業やセミナーも担当しました。以前学んでいた日本語学校で教える立場になれたことは、とても印象に残っています。

私にとって、アクティブラーニングは大学生活の中でも特に大切な経験であり、かけがえのない宝物です。大学の授業だけでは学ぶことのできない社会での体験や、多くの人との出会いを通して、自分自身を大きく成長させることができました。また、調査の進め方や相手に分かりやすく伝える力も身につけることができました。これらの経験を今後の卒業研究や大学での学びに生かし、日本語教育や異文化理解についてさらに学びを深めていきたいと考えています。



アクティブラーニングでインドネシアへ行って

国際学部 3 年 長島 諭謙 愛知県富田高等学校出身

私はアクティブラーニング期間で日本の小学校とインドネシアへ行き「日本とインドネシアの給食の違い」について調査を行いました。最初はほんとに自分がこの調査をまとめられるか、自分の伝えたいことを相手に伝えることができるのか、など不安しかありませんでした。ですが、現地で実際に学校に訪問し、子供たちや現地の方と交流することによってだんだん自分の調査についての解像度や熱意が上がって行きました。また、現地に行くとインターネットで調べた情報だけでは分からないことも知ることができ、毎日が気づきや発見に溢れていました。



アクティブラーニング期間では、普段の授業とは違い、自分たちで考えて行動することが多く、最初は難しく感じることもありました。しかし、自分から行動してみることで新しい発見があったり、実際に体験することでより深く理解できたりすることが分かりました。準備から現地での活動までを通して、ただ教えてもらうだけではなく、自分で考えて行動することの大切さを学ぶことができました。今回の経験は学校での活動だけでなく、人生においても大事な学びになったと感じました。



想像を超えた邂逅

国際学部 3 年 近藤 佳稀 愛知県一色高等学校出身



私はアクティブラーニング期間を利用して、『「物語」と「現実」の交差』というテーマで国内のフィールドワークを行った。この調査では、聖地巡礼の形式を利用し、自分の憧れの場所で調査を行った。調査対象に選んだのは『南総里見八犬伝』と『宮沢賢治』。活動場所はそれぞれのゆかりの地である千葉県と岩手県だ。

この二つは、私が以前から好きだった作品と作家であり、憧れの対象でもあった。当日、実際に現場へ赴けば、遠くの地へ来たという高揚感と、憧れた世界観をこの目で見ることができるという喜びに満ちていた。写真や物語に出てきた描写を想像しながら、いざ憧れの景色と邂逅を果た

すと、想像していたものと実物とのギャップを体感した。例えば、建造物が想像より大きかったり、モデルになった場所を様々な角度から見たり。文章や絵だけでは見えないものを見る体験は、想像の領域を超えた貴重な経験だった。またこの経験から、想像した世界の現場に飛び込むことで見える景色は、自分にしか見えないものであり、それを見るだけでも現場に赴く価値は十分にあることを学んだ。

憧れの景色を巡り、想像を超えた体験ができたこの期間を、私は忘れることは無いだろう。



☑ 資格とキャリア

国際学部で取得できる英語科教員と日本語教師の資格をキャリアにつなげようと、この二つの分野で活躍する在学生と卒業生からの報告です。

英語科教員を目指して

国際福祉開発学部 4 年 水谷 武月 愛知県東浦高等学校出身

私はこの国際学部で教員免許を取れることを高校生時代のオープンキャンパスで知りました。留学生と共に学べることや、先生方や学生同士の距離が近い雰囲気から、この学部で教員免許を取ろうと決めて入学しました。



教職課程は 2 年次から始まり、様々な教育理論や教授法を学んでいきました。アクティブラーニング期間では何か実践したいと感じ、地元愛知県東浦町の母校である小学校と中学校で学習支援や生活支援のボランティア活動を始めました。実際の学校現場に入り、授業中の学習補助や特別支援学級の児童・生徒の支援を中心に活動をさせてもらいました。この活動で子どもひとりひとりを見る力がついたと感じています。

3 年次の教職インターンシップという科目では東海市内の小学校か中学校に 10 日以上 40 時間以上の日程を組み、学校現場を理解することを目的として様々な体験をしました。授業内補助や校務作業など、内容は学校により異なりますがとても貴重な機会でした。4 年次の 3 週間の教育実習では、学習指導案作成から始まり、多くの先生や生徒と関わり合いながら実習を進めました。教育実習を経て、将来教員になるという意志がより確かなものとなりました。

卒業後は生まれ育った知多半島で教員として働きたいと考えています。卒業まで気を抜かず、卒業論文執筆や将来に向け日々邁進していきたいです。



英語科教員になって

藤波 朱泉 2026 年 3 月卒業 ミャンマー出身



2026 年 3 月に国際福祉開発学部を卒業した藤波朱泉です。ミャンマー出身の私にとって、日本の教員免許取得は大きな挑戦でしたが、その資格のおかげで中学校と小学校の教員として働くことができ、充実した日々を送っています。

中学校はインターンや教育実習の経験があり、概ねイメージどおりの授業ができていると思います。難しく感じたことは、勉強意欲や知識が異なる生徒達に対して、できる限り一人ひとりに理解してもらうことでした。ゲームやグループワークを取り入れ興味をもたせつつ授業を行い、一学期の目標は達成できたと思います。

小学校は、教育委員会からの要請で中学校との兼務となりました。子ども達が中学校の英語の授業で困らないようにすることが目的です。しかし、英語に興味を持つ生徒が少なく、また教材は中学校の英語を準備できるレベルではなく、試行錯誤しながらの授業なので悩むことが多いです。

教えることの難しさを痛感した 4 ヶ月でしたが、2 学期以降も丁寧に、また楽しい授業を心がけ、教員としてのキャリアを積みたいと考えています。皆さんも是非色々なことにチャレンジしてみてください。



日本語教師への学び

国際福祉開発学部 4 年 高橋 衣織 三重県代々木高等学校出身

私は入学当初から日本語教師養成課程への登録を決めていたわけではありません。しかし、大学1年生で受講した「日本語学Ⅰ」や「日本語教育概論」を通して、日本語を母語話者の視点から見つめ直す面白さに惹かれ、養成課程で学ぶことを決めました。助詞の使い分けや日本語教育の現状、教材研究など、多様な視点から日本語を学ぶ授業はどれも新鮮で、先生方も私たちの「もっと知りたい」という気持ちに寄り添い、丁寧に指導してくれました。先生との距離が近かったことも、私が日本語教師養成課程を楽しく学べた理由のひとつです。



就職活動では、日本語学校だけでなく、海外営業など国際的に活躍できる仕事も幅広く見ていました。しかし、自分の将来について考える中で、日本語教師として日本で暮らす外国人を支えたいという思いが強くなり、先生方のご協力もあって日本語学校への就職が決まりました。

2024年には登録日本語教員制度が始まり、日本語教師は国家資格となりました。私も11月の試験合格に向けて、毎朝のスキマ時間の学習や先生の研究室での勉強会を通して少しずつ学んでいます。大学で培った学びを大切にしながら、将来は多くの学習者に信頼される日本語教師を目指して努力していきたいと思っています。

日本語教師になって

三矢 典明 2024年3月卒業 鹿児島県屋久島おおぞら高等学校出身

大学在学中に日々の講義やカースティ祖父江ゼミでのワークショップ等の経験を通して、日本語教育及び多文化共生をテーマにたくさんの学びを得ました。そして、現在は岡崎日本語学校にて日本語教師をしております。ただ日本語を教えるのだけではなく、外国人留学生が日本に来て生活をするサポートをすることもまた大切な仕事のうちのひとつです。彼らの学びがより有意義な時間になるよう、また、日本での生活がより過ごしやすくなるよう、常に考えながら仕事をしています。

留学生たちは故郷、家族のもとから離れ、日本語という言葉、それにまつわる文化を通して様々なことを学んでいます。私が最も意識しているのは、彼らの先生であることと同時に、もし自分が留学生として外国で生活していたらどんなことが困難であるか、第二言語を習得するならどうすべきかを一人の人間として考えて様々な角度からアプローチができるよう努めています。今この瞬間を生きる者同士としてのリスペクトは教員側であっても必要だと考えます。

大学で学んだことや経験を活かし、これからも留学生の日本での生活を見守るとともに、彼らの今後のさらなる活躍を祈りながら、毎日一緒に頑張っていきます。



☑ 卒業後の進路：大学での学びを就職へ

国際学部でのゼミ活動や、学外でのボランティア活動からアルバイトまで、それぞれの経験を活かしてキャリアを切り拓いています。卒業生 2 人からの便りです。

伊藤凌雅 中部国際空港旅客サービス株式会社 2026 年 3 月卒業 東京都 NHK 学園高等学校出身

私は大学で英語教育について学び、ゼミでは小学生を大学に招待して英語の活動を楽しむ「イングリッシュ・サロン」を学生主体で開催しました。活動を通して、相手に分かりやすく伝えることや、興味を持ってもらうために相手の立場に立って考えることの大切さを学びました。また、当日に起こりうる状況を想定した事前準備や、ゼミ生同士でのイメージ共有、計画立案などを経験できました。

空港業界に興味を持ったきっかけは、合同説明会で会社説明を聞いたことです。「笑顔」や「相互理解」を大切にしている会社の理念と、自分がやりたいことが合致し、空港でお客様に寄り添う仕事がしたいと考えようになりました。

就職活動では、さまざまな説明会に参加し、企業の方と直接話す機会を大切にしました。面接対策では、企業がどのような人材を求めているのかを考え、そこから逆算して自分の経験や強みを伝えることを意識しました。

現在は「お客様を第一に考え、感動していただける行動や接客を目指す」という理念をもとに、笑顔で仕事をしています。優しく親身になって教えてくださる社員の方も多く、日々自分に何が必要なのかを考えながら働いています。大学で学んだ「相手の立場に立って考える」という姿勢も活かしながら、これからも経験を積み、お客様に喜んでいただける接客を目指して成長していきたいです。



レティウ タム 昭和コンクリート工業株式会社 2024 年 3 月卒業 ベトナム出身



国際福祉開発学部を卒業し、現在は岐阜県の旅行会社(昭和コンクリート工業株式会社旅行課)で働いているタムと申します。海外から日本を訪れるお客様の旅行手配に携わり、多くの方々と協力しながら一つひとつの旅行づくりに取り組んでいます。振り返ると、現在の仕事につながるきっかけは大学時代の挑戦や人との出会いにありました。

大学生活では「まずは挑戦してみる」という気持ちを大切にし、興味を持ったボランティア活動に積極的に参加しました。大学3年生の活動で現在の勤務先の先輩と出会い、任された役割に責任を持って行動していた姿を評価していただき、アルバイトとして働く機会を得ました。

アルバイトでは、仕事に責任を持って取り組み、分からないことは積極的に質問しながら経験を重ねました。初めて一人で出張や商談を任された時は不安もありましたが、「まずはやってみよう」という姿勢で挑戦し続けたことが自信につながりました。その姿勢を評価され、卒業後は正社員として入社しました。

現在の仕事では急な変更やトラブル対応など大変な場面もありますが、お客様からの「楽しかった」「また日本に来たい」という言葉が励みになります。大学で学んだ日本語や異文化理解、そしてボランティアで培った主体的に行動する力は大きな財産です。

在学生の皆さんには、失敗を恐れず興味のあることに挑戦してほしいと思います。何気ない経験や出会いが思いがけないチャンスにつながる可能性があります。学生時代の経験を大切に、自分らしい道を切り拓いてください。



編集後記 今回のニュースレターでは、1 年次のフィールドワークから上級学年のアクティブラーニングへ、さらには資格取得からキャリア開拓へと、学生主体の学びが実践されていることを紹介しました。国際学部の在学生・卒業生の活躍する姿が、皆様に届くことを願います。(担当:米津明彦)

◎2026 年度 東海キャンパスでのオープンキャンパス日程: 5/17(日)、5/30(土)、8/1(土)、8/2(日)、8/30(日)、9/27(日)、2027 年 3/21(日)

発行人: 日本福祉大学 国際学部

〒477-0031 東海市大田町下浜田1071番地

TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281

編集人: 国際学部 学部長 佐藤 慎一

問合先: 東海事務局 国際学部担当(kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp)

Instagram



@NFU_KOKUSAI

フェイスブック



学部教員紹介

